俺は飛龍さんに甘えられたい。

LinoKa

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飛龍さんってキリッとしてるけど、甘えたらどうなるんだろうなー。そう思ってやりました。

目次

プロローグ
第１話　急にどうした ―― 1
第２話　戦略を練ろう。 ―― 6
第３話　お酒はほどほどに ―― 14
第４話　どんなに備えてても、ミスは起こる時は起こるんだよ。
23
結婚した。
第５話　なんだこいつら ―― 29
第６話　いくつになってもお化けは怖い。 ―― 34
第７話　マゾ ―― 41
第８話　料理が出来て人間が出来てない。 ―― 48
第９話　隠し事はいつかバレる。 ―― 54
第１０話　過労って怖いよね（小並感）。 ―― 61
第１１話　性欲と性格は関係ない。 ―― 66

プロローグ

第1話　急にどうした

気弱、という言葉がある。
文字通り、気が弱い人の事だ。俺は、自分が気弱である自覚がある。いや、気弱というより臆病な自覚があった。
何故なら、勝敗はどうあれ人と殴り合いの喧嘩はできないし、エロ本は買えないし、お化け屋敷にも入れない。俺の肝っ玉はおそらくミクロ単位以下だろう。
そんな俺だから、一部の艦娘からはチキン野郎とか思われたりもしているが、まぁ、別にそんな事は俺は気にしない。
さて、上司から怒られるのと、徹夜の作業になるのは怖いから、さっさと仕事終わらせるか。キーボードをマッハで叩きながら、報告書を作成してると、コンコンとノックの音が聞こえた。
「はーい？」
返事をすると、入って来たのは朝潮、大潮、満潮、荒潮の四人だった。遠征から帰って来たようだ。
「司令官！遠征、完了しました！」
朝潮がピシィッて音がしそうな程の見事な敬礼をした。俺は立ち上がって出迎えた。
「そ、そんな畏まらなくて良いって。お疲れ」
「こちら、ボーキサイトです」
防空射撃演習だったか。
「ああ、それ資材の備蓄庫に置いといて。そしたら、休んで良いから」
「司令かーん！大潮、頑張りました！撫でてください！」
「ん、良いよ」
俺は大潮の帽子を取ると、頭を撫でてやった。すると、隣の朝潮がチラッチラッと大潮を見ていたので、反対側の手で朝潮も撫でた。
「し、司令官⁉？あ、朝潮は別に……！」
「いやいや、朝潮も頑張ってくれたし。遠慮するなよ」

「で、では……お言葉に甘えさせていただきます……」
顔を赤くながらも、嬉しそうな顔をする朝潮はすごく可愛かった。
なんか小動物みたいで。
「ふんっ。私と同型艦のトップ2がそんなのに喜ぶなんて、信じられないわ！」
不愉快そうな声で、満潮が呟いた。
「ね？荒潮」
「あら、じゃあ私も撫でてもらおうかしら」
「あっ、荒潮ぉ⁉？」
荒潮がこっちに来たので、大潮の手を止めて、頭を撫でてやった。
その様子を見て、満潮は顔を真っ赤にして俺の脛を蹴った。
「痛い⁉？」
「ち、ちょっと！不公平なんじゃないの⁉？」
「だったら、満潮も素直に言えば良いと思います！」
大潮に言われて、満潮は顔をさらに赤く染めた。
「な、何がよ⁉？」
「撫でて欲しいならです！ですよね、朝潮お姉ちゃん？」
「はふぅ～」
「ほら！」
「いや、全然返事になってなかったじゃない！」
気持ち良さそうな声を上げる朝潮に、満潮は大声を出しながらも心は揺らいでるようだった。しばらく葛藤した後、朝潮の隣に来た。
「し、仕方なくなんだからね！」
「はいはい……」
「返事は一回でいいのよ！」
「わかったから脛を蹴るな」
そのまま、四人をループして撫でてやってると、満足したのかようやく執務室を出て行った。ボーキサイトを置いて。
俺はため息をついた。まぁ、遠征で頑張ったんだし、資材運ぶくらいは俺がやるか。
ボーキサイトを持って、執務室を出ると、ドアの前で飛龍さんが

待っていた。飛龍さんには、艦載機の開発をお願いしていた。
「ん、おお。飛龍さん」
「あ、提督。ちょうど、艦載機の開発が終わったところです」
「お疲れ様です」
「見てください！烈風二つに流星改一つですよ⁉？すごくないですか」
「はい。あの、ポーキサイト置きに行かないといけないので後で……」
「……」
俺は早足で飛龍さんの横を通り過ぎようとした。子供ならともかく、高校生以上に見えて、元気な女の子は少し苦手だ。
だが、俺の前に飛龍さんは立ち塞がった。
「提督、随分と駆逐艦には甘いんですね？」
「は？」
「空母とか戦艦が頑張っても、頭なんて撫でてくれたことない癖に」
……何を言い出すんだこの人は。明らかに成人してる女性の頭なんて撫でれるわけないじゃん。
「あの、すいません。通してくれませんか？」
「嫌」
「え、なんで」
「……ふんっ」
……なんか、よく分からないけど、頭撫でれば満足するのかな。いや、でもこれで違ったらセクハラ憲兵直行コースだし……一応、聞いてみるか。
「……撫でて欲しいんですか？」
「んなっ……⁉？ち、違うわよ！」
えー……じゃあどうしろと……。と、思ったら、飛龍さんは顔を赤らめて、そっぽを向いて言った。
「で、でもっ……たまには、駆逐艦以外を撫でても、良いと思いますけど……」
「……飛龍さんは、撫でられても良いんですか？」

一応、そこを確認した。さっきのは聞き方が悪かった。
すると、飛龍さんは恥ずかしそうにコクッと小さく頷いた。俺はボーキサイトを床に置くと、飛龍さんの頭の上に手を置いた。
「いつも、お疲れ様です」
「ッ」
そのまま手を動かした直後、俺の中に電流が走った。今までは駆逐艦を撫でてあげていたが、それとは、なんか、こう……駆逐艦では満たされない違う何かが走った。
自分より少し低いくらいの高さの頭、成人してる女性を子供のように扱う仕草、それを受けて恥ずかしそうにしながらも嬉しそうにする女性……いやいやいや、落ち着け、俺。こんな事を毎回していたら、憲兵にしょっ引かれるぞ。それだけは勘弁したい。
そう思って、「もう良いですか？」と確認を取ろうと飛龍さんを見ると、驚くほど気持ち良さそうな顔をしていた。
え？誰これ？ってなるレベル。
「……あ、あのっ、飛龍さん？」
声を掛けると、ハッとする飛龍さん。それに合わせて、おれは手を退かした。
「もう、良いですか？」
聞くと、飛龍さんはふるふる震えて出した。
なんか悪いことしたかな、と思ったら、飛龍さんは俺を睨んでいた。
「な、なんですか…これは……！」
「へっ？」
「て、提督はこんな事を毎回駆逐艦にしていたんですか⁉？」
「え？なんかダメだった？」
「逆よ！気持ち良すぎるのよ⁉？」
あー……ちょっと言ってる意味が分からない。
「や、普通に撫でてるだけなんだけど」
昔からよくペットを飼ってたから、それを撫でる感じで撫でてただけなんだが……。そしたら、新たな道を開きそうになっ……いかんいかんいかん！憲兵にしょっ引かれるわ！

「こ、これからはナデナデ禁止だから！」
「ナデナデ？」
「頭を撫でること！駆逐艦の子達ならまだしも、それ以外はダメ！良い⁉？」
　あ、それはありがたい。次に誰か成人女性を撫でたら、俺は多分、新たな道から抜け出せなくなる。
「分かりました。じゃ、そろそろボーキサイト置きに行かないといけないんで」
「約束ですからね。……あ、艦載機どこに置けば良いですか？」
「空母で自由に使ってください」
　それだけ言って、俺は備蓄庫に向かった。

　ちなみに、結論から言うと、禁止するのは遅過ぎた。俺が一度でも飛龍さんを撫でてしまった時点で？お互いに止まらなくなっていた。

第2話　戦略を練ろう。

あれから、一週間経った。俺の身体が小刻みに震えていた。あれ以来、成人女性を撫でるという行為をしていない。

だからだろうか、すごく成人女性を撫でたい。あの時の手の感触が頭から離れない。なんだこれ、俺ってそんな特殊なフェチあったのか。

いや、確かに飛龍はうちに一番最初に来た空母で、最初に建造した艦娘だよ？馬鹿みたいにウブな先輩から色んな艦種のレシピ教わって、とりあえず空母からと思って建造したら出ちゃったんだもの。その分だけ割と長い期間いたわけだけど、でもだからって飛龍の頭撫でてこんな事になると思わなかった。

ああ……！撫でたい！いや、落ち着け。俺はメリットとデメリットの計算がちゃんとできる男だ。こんな所で部下に手を出して全部台無しなんて許されると思うな。

「……仕事しよう」

それで全部忘れよう。俺はパソコンをカタカタと打って仕事を再開した。その直後、

「し、失礼します……」

飛龍さんが入って来た。直後、右手がピクッと本能的に動いたのを察したため、左手でノートパソコンを閉じた。パソコンに勢いよく右手は挟まれ、真っ赤に腫れ上がったが、我慢して聞いた。

「ど、どうしたんですか？」

「い、いえ、その……」

珍しく歯切れの悪い飛龍さんだった。普段、ハキハキとキリッとしてるのにどうしたんだろ。生理か？

「アレから一週間、私、頑張ってＭＶＰ取りましたよね？」

それは確かにそうだ。なんか知らんけど、飛龍さんは演習でも襲撃でも、驚くほど容赦無く相手を叩いて、ＭＶＰを掻っ攫っていた。

……少し俺が引くほど。

「そうですね」
「……」
　飛龍さんはしばらく黙り込んだ後、自分の両頬をパァンッと叩いた。え？何してんの？と、こっちが思ってると、飛龍さんは気合の入った表情で言った。
「先週から、提督のナデナデが忘れられないんです」
「は、はぁ」
「ですから、その……これから、ＭＶＰを取った日だけで良いので撫でて下さい」
「は、はぁ？」
　この人何言ってんの？バカなの？先週、禁止してきたのあんただろ。それを今更、自分が我慢できないからって都合良すぎると思わない？
「喜んで」
「そ、即答？」
　こっちは本人の了承を得たらやるに決まってんじゃん。むしろこっちのご褒美だわ。じゃあなんで禁止したか聞かないのって？そんなもん知るか。
「ホント？良いの？」
「良いですよ。だけど、条件があります」
　だけど、いくら本人の了承を得たからって、それは憲兵への言い訳になるだけで、他の艦娘に見られたら面倒なのは変わらない。まずはそこをキッチリしなければならない。
「条件？何？」
「時を場合を考えるんですよ。お互い、周りの人に知られたくないでしょ？」
「……確かに」
　まぁ、偉そうに言ったが、俺にも案があるわけではない。夜中に俺の部屋に来るとかだって、飛龍さんは蒼龍さんと同じ部屋だし、バレる可能性はゼロじゃない。周りの連中には、絶対にバレたくないんだよね。

「どうします？」
「へ？ど、どうって……」
本来なら、一週間様子を見て、誰がどのタイミングで来るかをメモし、１日の時間の中で確実に誰も来ない時間帯を割り出したいが、それまで俺の禁断症状が保たれるとは思えない。
２４時間の内の、１分間だけを指定し、誰も来ない指定した場所に集合しても、その集合場所に行くまでに見つかる可能性もあるし、その時間付近で飛龍さんが誰かといて、途中で別れられそうな雰囲気じゃなかったら怪しまれる。
大袈裟だと思うかもしれないが、絶対バレたくない時は臆病になり過ぎて悪いことは無い。
「そりゃあ、私を秘書に……って、提督？」
そもそも鎮守府内はどこも危険だ。絶対人が来ない場所なんて無いし。と、なると鎮守府の外だが、目撃者なんて何処にいるか分からない。飛龍さんが仮に一週間連続でＭＶＰを取ったとすると、その一週間の間、ずっと飛龍さんの頭を撫でるために、何処かで待ち合わせして飛龍さんの頭を撫でないといけない。勘のいい奴は、俺と飛龍さんが毎回、必ず一緒に鎮守府からいなくなる時間帯が出て来ると勘付く可能性もある。
「あの、聞いてます？提督」
詰んでるなぁ、これ……。でも、撫でたいなぁ。あのモフモフな頭を撫でくりまわしてやりたい。
諦められねーなやっぱ。俺は頭の中で全力で作戦を考えてると、バンッと机を叩かれた。
「提督！」
「うおっ！ビビったぁ……な、なんですか？」
こいつうるせーな。撫でて欲しいなら少しは一緒に作戦考えろよ。
「そんなに考えなくても、私を秘書艦にすれば良いじゃん」
「……」
なんだこいつ。天才か。
「そっか……秘書艦ならいつでも頭を撫でられる。隣で仕事してるか

ら、ノックの音がしても姿勢だけ正せば問題ない」
「え？あ、う、うん……」
「万が一、姿勢がすぐに戻らなくても、わざと咳したりして、俺が返事を少し遅らせれば問題ない」
いやでも、今日急にそんな事決めたら怪しまれ……いや、仕事手伝ってもらってたら、割と楽になった事にしよう。それで、明日からもよろしく頼むって定で行けばイケる。
「……そこまで考えてなかったんだけどなー……。ま、いっか」
と、いうことで、俺と飛龍さんの新しい日課が始まった。
早速、飛龍さんは俺の隣に椅子を持って来て座って、頭を少し差し出した。俺はその頭に、手を置いた。
「んっ……」
飛龍さんから吐息が漏れる。少しずつ手を動かして、フワフワな頭を撫でた。
「んぅっ……」
若干、顔を赤らめながらも、飛龍さんは気持ち良さそうな顔をした。
一方の俺も、飛龍さんの表情から徐々に照れが無くなっていくのと、撫でている手の感触が尋常じゃなく心地良くて、表情には出さなかったものの、心はぴょんぴょんしていた。
左手で飛龍さんの頭を撫でて、右手でキーボードを打ってると、ズンッと左の肩に体重が掛かった。
「おいおいおい……嘘でしょ？」
横を見ると、飛龍さんが俺の肩に頭を乗せて眠っていた。俺の撫ではどんな効能があるんだよ……。早速、誰かが来たら言い訳できない状況になったな。
さて、どうしようか。飛龍さんは……うん、仕事をしていた事にしよう。その途中で、疲れて寝てしまった。ここ最近？ＭＶＰ連取して疲れてるのは分かりきった事だし、辻褄は合うだろう。
飛龍さんにやってもらっていた定の仕事は……書き仕事だと筆跡でバレるし、一枚も書いてなかったら不自然だから、俺の下働き的な感じにしてもらうか。書類のファイリングだな。

すでに終わった書類をファイルに入れて、飛龍さんの前に置いた。よし、後は飛龍さんの体を机に伏せさせて、眠らせれば……、
「いや、無理でしょ」
それ、俺が飛龍さんの身体に触るってことでしょ？頭ならともかく、身体に触ったりなんてしたらセクハラだよねこれ。頭でもグレーゾーンなのに。
「ｚｚｚ……」
さて、どうしたもんか……。ったく、俺が頭を悩ませてるってのに、本人は呑気に寝てやがる。
「……ま、いっか」
飛龍さんがどこで寝ようが、多分問題ないでしょ。
諦めて俺は仕事を再開しようとした、その直後だった。飛龍さんがグラッと倒れた。で、俺の膝の上に頭が落ちた。
「えっ」
ひ、膝枕してるみたいじゃねぇか……。何のための隠蔽工作だと思ってんだよ……。
いや、まぁいいか。ここで飛龍さんが寝ててくれれば、前からは机に隠れて、飛龍さんの姿は絶対見えない。
すると、ノックの音がした。
「失礼しまーす」
「んっ」
入って来てのは蒼龍さんだった。
「どうしました？」
「いや、飛龍が帰って来ないから。ここに来るって言ってたんだけど……」
このバカはなんで……いや、怪しまれないようにする為に言うのは当然か。下手な嘘をつくと、必ずどこかで辻褄が合わなくなるからな。
「さっき出て行きましたよ」
「そう？ありがと、またね」
まぁ、俺は嘘をつくけどな！蒼龍さんは軽く手を部屋から出ようと

した。
　その直後、
「やだ。私ったら寝ちゃってた……？」
　飛龍さんが起き上がった。目をゴシゴシと擦りながら、辺りを見回すと、蒼龍さんが目に入った。
「……えっ？」
「んっ……？そう、りゅう……？」
「……」
　俺は額に手を当てて、俯いた。
　蒼龍さんの表情が、攻撃的な色に変わっていった。
「……提督、どういう事？」
「っ……」
　あ、無理。終わった。そんな顔されると何も言えないじゃん。
　人は怒ってる時は人の話を聞くことなんて出来ないんだから。どんな理由を言っても、悪意的に取られるのがオチだから。
「ねぇ、提督。飛龍とナニしてたの？」
　いつの間にか、机の前まで移動して来ていた蒼龍さんが机に手を着いた。
「え、いや……」
「いや、何？」
「……」
　こ、怖い……。なんだよこの人の眼力。ていうか、なんで怒ってんの？
「あー、蒼龍」
　状況を察したのか、隣から飛龍さんが口を挟んだ。若干、小刻みに震えていた俺の肩に手を乗せると、説明してくれた。
　すると、蒼龍さんの表情は安堵した顔になった。
「……つまり、飛龍に変な事しようとしてたわけじゃないのね？」
「むしろ、私の方から頼んじゃって……」
「提督も、ちゃんと説明してくれれば良かったのに……」
「そうですよ。何であんなビビってたのよ」

「……いや、怖くて。なんかすごく怒ってたし」
俺はほっと胸を撫で下ろした。
「すみません。なんか、一週間前から飛龍の様子がおかしくて、『提督……そんないきなり……迷惑かな……』とか呟いてて、もしかしたら変な事されてるのかと思って心配だったんです」
お前の所為かよ……。俺は飛龍さんを睨んだが、飛龍さんは目を逸らしていた。
「でも、ナデナデねぇ……。そんなに良いの？提督のナデナデ」
「良いんだって。蒼龍も撫でてもらえばわかるよ」
「じゃあ、良い？」
「別に良いですけど」
蒼龍さんはそのまま俺の前に頭を下げた。俺はその頭に手を乗せて撫でた。
「……」
「気持ち良くない？」
「……普通じゃない？」
「えっ？」
「別に。普通？ていうか、飛龍に変な性癖があるだけなんじゃないの？」
「うえっ⁉？」
せ、性癖……？頭撫でられたい、みたいな？
「ち、違うから⁉？そんな特殊な性癖ないから！」
「いやーでもそうとしか思えなくない？ね？提督」
「いや俺に聞かれても……」
ていうか俺の前で性癖の話とかすんなよ……。俺、何も聞いてないからね？
「……」
ほらぁ、飛龍さん顔真っ赤じゃん。どうしよう、これどうすれば良いんだろ。
すると、飛龍さんはガタッと立ち上がって蒼龍さんに言った。
「と、とにかく！私、これから提督の秘書やるけど、周りの人に本当の

こと言わないでよね！」
「分かってるって。周りの人に性癖知られたくないもんねー？」
「ち、違うってばだからぁ！」
蒼龍さんはケタケタと笑いながら部屋を出て行った。
俺と飛龍さんの間に流れる、気まずい空気。
「……」
「……」
「……違うからね」
「何も言ってませんけど」

第3話　お酒はほどほどに

翌日、俺が一人で仕事してると、第一艦隊が帰投した。ぶっちゃけ、指揮をさっきまで執ってたので、結果は知ってるから、報告なんて形だけなんだけどね。
「艦隊が帰投しました」
飛龍さんがピシッと敬礼した。
「乙。てか、毎回思うんだけどさ、敬礼やめません？」
「作戦完了です」
無視かよ。
「じゃあ、小破以上の人は入渠。他は自由にして下さい」
そうしれっと言うと、周りの人達は部屋を出て行った。残ってるのは飛龍さんだけである。
「えっと……提督」
声をかけてきた飛龍さんを右手で静止すると、いらない紙の裏に文字を書いて見せた。
『執務室の扉の裏に艦娘が聞き耳立ててる可能性あるから待って』
「……」
いやないでしょ、といった表情を浮かべる飛龍さんだが、可能性はゼロじゃない。ゼロじゃないということは、危険だ。
「トイレ行って来ます。それまで、休憩しててください」
「あ、う、うん……」
飛龍さんは少しシュンっと落ち込んでソファーに向かった。俺は本当にトイレに向かった。
申し訳ないけど、俺は完全に安全な状況じゃなきゃ危ない橋は渡らない。
トイレに行って戻って来た。その間、執務室に来る影はない。
部屋の中に入ると、飛龍さんはコーヒーを読んで待っていた。
「お待たせしました」
「あ、やっと来た。遅いよー」

「どんだけ、楽しみにしてたんですか」
「ち、違うから！」
「はいはい。じゃあ、業務机の横に来て」
「……ソファーじゃダメなの？」
「誰か来たら、すぐに仕事に戻れるようにしないといけないんだよ」
　納得してないような表情を浮かべながらも、飛龍さんは机の前に椅子を移動して座った。その隣に俺が座ると、飛龍さんは頭を差し出した。
「……今回は寝ないでくださいね」
「わ、分かってます！」
　飛龍さんの頭を撫でた。
「……ちなみに、この……なんでしたっけ？イイコイイコ？」
「ナデナデ！」
「このナデナデっていつまで続けるんですか？」
「……ずっと」
「や、わけわかんないんですけど……」
「し、仕方ないじゃない！提督のナデナデ、気持ち良くて、もう提督のナデナデ無しじゃ生きられないの！」
「なにそれ、告白？」
「は？」
「冗談だからその真顔やめません？」
　人ってそんな冷たい顔できるんだ……。気温が氷点下まで下がったかと思ったわ。
「提督はさ、」
「ん？」
「なんで私をたくさん使ってくれるんですか？」
「はっ？」
「だって、二航戦って一航戦や五航戦に比べて性能劣るじゃないですか。それなのに私は一応、空母で最高練度ですよ」
「んー……最初に来た空母だからじゃないですか？」
「そ、それだけ？」

「はい。だって、別の艦種はともかく、同じ艦種で後から来た人に負けたくないでしょ？」
「それは、まぁ……」
「小学生の時、俺って負けず嫌いだったから、そういう気持ちは分かるんですよ」
「へぇ……意外」
「何が？」
「小学生の時、負けず嫌いって所」
「知ってた」
　あの時は負ける事自体がダサいと思ってたんだよ。今は、負ける事で自分のプライドを無くし、これ以上失うものが何も無くなってから本気出してるからね。
「ありがとうございます。もう大丈夫です」
「良いの？なら、今日は休んで良いですよ」
「へ？でも、秘書艦として仕事は……」
「いいって。ていうか、あとは今回の出撃の作戦報告書で終わりだし」
「……じゃあ、せめてこの部屋にいさせてください」
「なんでよ」
「ここで休んでます」
「まぁ、良いけど」
　まぁ、先に上がるのって何と無く気まずいよな。気持ちはわかるよ、飛龍さん。
　飛龍さんはコーヒーを二人分淹れて、片方を俺の机の前に置いた。
「え？仕事しないんじゃ」
「ついでよ。ついで」
「あ、そう」
　飛龍さんはソファーの上で、コーヒーを持ってくつろぎ始めた。そうそう、それで良い。俺は仕事を再開し、しばらくキーボードをカタカタと叩いた。
　数分後、仕事を終えて俺は軽く伸びをした。
「ふぅ、完了」

「あ、終わった？」
「あ、はい」
「じゃあ、飲みに行きましょうよ」
「へっ？なんで？」
「良いじゃないですか、たまには」
「まぁ、別に良いですけど」
と、いうわけで飛龍さんと居酒屋に向かった。まぁ、居酒屋って言っても、普通に鳳翔さんの所なんだけどね。
「いらっしゃいま……あら、提督。珍しいですね」
鳳翔さんが挨拶してくれた。
「どうも」
「こんばんはー、鳳翔さん」
「あら、飛龍さんとお二人ですか？」
「はい、一応」
二人席に座ると、とりあえずビールを二つ注文して、俺はメニューを開いた。
「何食べます？提督」
「んー、軟骨揚げと塩揉みキャベツがあれば文句はない」
「じゃ、鳳翔さん！軟骨揚げ、塩もみキャベツ、タコワサ、野菜炒めで！」
「畏まりました」
メニューも見ずに注文する飛龍さんを見て、俺は少し関心してしまった。
「よく来るんですか？飲みに」
「え？な、なんでですか？」
「いや、メニュー見てないのに注文してたんで。しかも今言った料理、全部書いてあるし」
「あ、あははっ……まぁ、蒼龍とよく二人で。後は、一航戦のお二人とか」
ふーん、俺ってもしかしたら、あんまりどの艦娘同士が仲良いとか、あまりわかってないかもしれない。まぁ、俺も向こうにナンパして

るって思われたくなかったから、自分から話しかけたりしなかったんだけどね。
　すると、ビールが二本、隼鷹に運ばれてやって来た。
「お、お待たせいたしました……」
「どーも。……って、隼鷹さん？何してるんですか？」
「……この前、酔っ払って店の椅子叩き壊しちまって、修理費を働いて払えって……」
　よし、これからはもう少し俺もここに来ることにしよう。飲みに来るんじゃなくて、アル中達を止めに来る。
「一週間タダ働きの上、一ヶ月禁酒って言われた……」
「自業自得ですよ」
　俺はそう言うと、ビールのグラスを持って、隼鷹に差し出した。
「？　提督？」
「一口だけ。鳳翔さんには内緒ですよ」
「提督～‼？良いとこあるなぁ‼？」
　隼鷹さんは上機嫌にグラスをとった。
　バカ、声デケーよ。そんな大声出すと……、
「隼鷹さん？」
　鳳翔さんがやって来ちゃうでしょ……。オロチよりも半端ない威圧で、隼鷹さんの動きを止めた。
「ほ、鳳翔さん……」
「何をしているのですか？まさか、お客様が注文されたお酒を飲もうなんて、していませんよね？」
「あ、あはは……そんなまさか……」
　隼鷹さんは机の上にビールを置くと、逃げるように去って行った。
あーあ、せっかくの機会を……。
　隼鷹さんをぼんやり見てると、鳳翔さんが少し困った顔で俺に言った。
「提督、あまり隼鷹さんを甘やかさないでください」
「すみません。ここで借り作っとけば、何かに使えると思って」
「はい。ご注文の塩揉みキャベツ。……それと、女性と一緒に来てい

るときは、他の女性と話すものではありませんよ」
鳳翔さんはそう言い残すと、店の奥に帰った。
まさか、飛龍さんが嫉妬なんてするわけ無いだろ。そう思って、飛龍さんを見ると、少し不機嫌そうだった。
「……隼鷹には甘いんですね」
「いやそんなつもりはないですよ……。ていうか、別に嫉妬されるような仲じゃないですよね」
「……いや、別に嫉妬してるわけじゃないですよ。ただ、今日は私と飲みに来てるのにーって、思っただけです」
うーん……そういうもんなのかな。まぁ、不愉快な思いさせたなら謝っておくか。
「すみませんでした」
「いや別に謝らなくても……。さ、それより飲みましょう」
飛龍さんに言われて、俺はグラスを持ち上げた。特に意味はないが、乾杯してビールを一口飲んだ。
「んっ……ふぅ……」
「美味しいでしょ。ここのビール」
「すみません、俺って未だにビールの味がよくわからないんですよね。不味いとも思いませんけど」
「……意外と子供なんですね」
「子供なのは悪いことじゃないでしょ。変に大人ぶってる方がみっともない」
「それ、暁ちゃんとかビスマルクに言ってあげて下さい」
「言っても聞かないでしょ」
「そうですけど……」
キャベツを食べると、さらにたこわさと野菜炒めがやって来た。
しかし、飲みってどんな話すれば良いんだろうな。世間話とか言うけど、イマイチ世間話って何なのか分からねぇんだよ。
タコワサを摘みながら話題を考えてると、飛龍さんがビールを一口煽ってから聞いて来た。
「提督は、好きな女性のタイプとかありますか？」

「……恋バナを異性としますか？」
「良いじゃないですか。最近、○○鎮守府の提督が大和さんと交際始めたらしいんですよ」
「○○鎮守府の？マジ？あの人が？」
　コミュ障お仕事マシーンのあの人が？
「マジです。あのロボットみたいな人でさえ、恋愛するなら、うちの提督だってするでしょ？」
「それどういう意味？俺もロボットに見えんの？」
「だから、提督の好みとか知りたいなぁって」
「好み、ねぇ……」
　あまり思い付かないけど……。
「じゃあまず外見から。身長は？」
「別に何でも」
「髪型」
「うーん……ボサボサじゃなければ別に」
「美人系？可愛い系？」
「面食いじゃないけど、アニメなら美人系」
「胸は？」
「男はみんなおっぱい星じ……おい、さっきから何の質問だよ」
「ふむふむ……じゃあ性格」
「無視かよ……」
　ため息をつきながら、タコワサと再び摘んだ。
「性格はー……一緒にいて落ち着ける人。騒がしい人はちょっとごめんかな」
「なるほど……。ふむ、大体分かりました」
「何が？」
「今日、部屋に帰ったら蒼龍と会議ですね」
「何の会議だよ。つーか報告会の間違いでしょ」
　この人、意外と酔いがまわるの早いのかな。ていうか、いつの間にかビール飲み干してるし。
「何か飲みます？」

「あー……じゃあ俺はカシオレ」
「女子ですか」
「別に良いでしょ。余り酒強くないんですよ」
「はいはい。すみませーん！カシオレと熱燗！」
熱燗なんて飲むのかこの人……。俺はカシスとビール以外飲んだことないのに……。
今度は逆に聞いてみるか。人が話を振る時って、大抵は自分に振ってほしい時の場合もあるんだよな。
「ていうか、飛龍さんの方は好きなタイプとかいるんですか？」
「多聞丸」
「タイプじゃなくてご指名かよ……。しかもこの世にいないし」
「仕方ないじゃないですか」
「ふーん……。ま、恋愛は人それぞれですからね。でも、俺は神霊の類は信じてないんで、もう少しリアリティのある回答を求めたいです」
「うーん……そう言われても、提督しか男の人と会ったことないし。後は、他の鎮守府の提督くらい？」
「それもそうですよね」
「その中でも、うちの提督って変わってますよね」
「え、そ、そう？」
「普通、艦娘が頭撫でてなんて言われたらドン引きするでしょう」
こいつ外でそんな話を……。まぁ、他に客いないし大丈夫だろうけど。
「そうか？俺は別に」
「ほら、変」
「別に変じゃないでしょ。艦娘に母親も父親もいませんから、たまに無性に甘えたくなっても仕方ない事だと思いますよ。それなら、鎮守府の最高責任者として、それに応じるのは当然だと思ってますから」
「……」
「なんですか」
「いや、意外と優しいんだなー、と思いまして」
「別に普通ですよ」

少し照れたので、野菜炒めを摘まんで誤魔化した。すると、飛龍さんが俺の顔を下から覗き込んで、いたずらっぽく笑って言った。
「じゃ、今夜は名一杯甘えちゃおっかな」
「その様子を周りに見られて良いならどうぞ」
「……やっぱやめておこう」
そんな話をしてると、鳳翔さんから新たな飲み物と軟骨揚げが運ばれて来た。

＋＋＋＋

翌朝。俺は目を覚ました。
「ってて……」
なんか、頭痛ぇな……。二日酔いか？そんな飲み過ぎたっけか……。
ガンガンする頭を抑えて、とりあえず上半身だけ起こした。軽く伸びをして、腰を捻ると、隣に全裸の飛龍さんが眠っていた。
「……えっ？」
世界が、静止した。

第４話　どんなに備えてても、ミスは起こる時は起こるんだよ。

飛龍さんが全裸で隣で寝ている。
えーっと、なんだこれ……どういうことだこれ……。何が起こったんだこれ……。
待て、昨日寝る前のことを思い出せ。……だめだ、飲んでたことしか覚えてない。飛龍さんに日本酒を飲まされてから記憶が飛んでる。
畜生、落ち着けよ俺。冷静になれ。チキンハートの俺が他人に、それも部下の女の子に手を出せるわけねーだろ。
これは夢だよ、夢。俺は自分の頬を引っ叩いた。
「……すごく痛い」
頬がヒリヒリする……夢じゃないっぽい……。
いや、待て。夢じゃなかった、なら次はどうする？考えろ。まずは着替えろ。
俺は飛龍さんを起こさないように立ち上がり、とりあえずいつものジーパンとシャツに着替えた。
恐らく、というか希望的観測だが、俺が酒を飲んで全部覚えてないということは、飛龍さんが覚えてない可能性も無いことは無いわけだ。つまり、運が良ければ、ワンチャン、万に一つの確率で無かったことにする事は可能だ。
とりあえず、飛龍さんに服を着せようと思い、その辺に落ちてる着物を拾った。下着は……うん、諦めよう。今は隠して、あとで燃やせば良いか。
「んっ……」
後ろから飛龍さんの吐息が聞こえて、俺はビクッと背筋を伸ばした。
おそるおそる後ろを見ると、飛龍さんが起き上がっていた。おっぱ

い丸見えだったので、俺は慌てて顔を背けて、手に持ってる着物を投げ捨てた。
「あっ、おっ、おはようございますっ……提督……」
俺は後ろを向いているので、飛龍さんがどんな顔をしてるのか分からないが、おそらく顔を赤くして、布団で自分の胸を隠しているんだろう。
クソッ……起きてしまったか……。だが、とりあえず記憶が飛んでくれれば或いは……！
有罪か、無罪か。最低でも、酒に酔っていたという情状酌量の余地で執行猶予くらいくれても良いのではないだろうか。
俺は顔を背けたまま、飛龍さんの二言目を待った。
「……き、昨日はっ、そのっ……は、激しかった、ですね……」
終わった。俺はその場で膝から崩れ落ちた。

＋＋＋＋

ここはどこだろうか、辺りは真っ暗だが、スポットライトのように俺の頭上のライトが俺を照らしている。目の前の木製の柵は……よくドラマに出る裁判所で見たことある奴だ。両手には手錠……そうか、俺は、捕まったのか……。
おそらく、飛龍さんに手を出したのがバレ、憲兵に捕まったのだろう。
すると、俺の5メートルほど前も、パッとライトが点いた。なんかディメンターみたいな格好をした人達が、九人座っていた。
「……これより、異端審問会を始める」
おい、これどっかで見たことあるぞ。日本海軍大丈夫か。
「罪状、嫌がる二航戦飛龍型航空母艦一番艦飛龍改二に、エロ同人の如く酒に酔ってレイプしたものとする……以上の内容に相違ないか？」
俺はレイプをしたのか……。酔っててよく覚えていないが、裁判において嘘を言うのは自分を不利にするだけだ。潔く認めて、少しでも軽い罪にしてもらおう。

「……ありません」
「ギルティ！エクスキューション！」
ちっとも軽くなってなかった。その判決に、最早反論すらする気も起きずに、ただボンヤリとしてると、目の前の柵が俺の足を包み込むように伸びて、拘束すると後ろに無理矢理薙ぎ倒された。
俺の両手の手錠が左右に引き裂け、十字架に磔られた様に寝転がった。その引き裂けた手錠から、ガコンガコンガコンと柱が伸びて、俺の首の上に来ると、ギロチンが天井からセットされた。トニー・ス○ークもビックリの仕掛けだなオイ。
「何か、言い残す言葉はあるか？」
裁判長らしい男に言われ、いや男かどうかは分からないけど、とにかく言われた俺は、涙を流して言った。
「……すみませんでした、飛龍さん」
直後、ハンマーで叩く音が聞こえて、ギロチンが降ってきた。それが、俺の首に向かって振って来た。
「本当に！すいませんでした‼？」
そこで、俺はガバッと起き上がった。
「……？」
「め、目が覚めた？」
俺は布団の中にいたようだ。夢、か……。隣には飛龍さんが座って、おしぼりを持っている。
「すごいうなされてましたよ。怖い夢でも見てたんで……なんでそっち向いてるの？」
俺は飛龍さんと反対側を見ていた。
「……飛龍さんに、顔向け出来なくて……」
「……あー、昨日の事？大丈夫よ、別に」
「大丈夫じゃないです‼？」
俺が声を張り上げると、飛龍さんは少しビクッと震え上がった。
「俺の罪状は、嫌がる二航戦飛龍型航空母艦一番艦飛龍改二に、エロ同人の如く酒に酔ってレイプした事なんです‼？こんな事……！軍人として、いや人として許されるものではない‼？俺は……俺は！」

懐から拳銃を抜いて、自分の首に銃口を当てた。ぶふっと吹き出す飛龍さんを無視して、俺は引き金に指をかけた。
「ちょっ、待った待ったタンマー！」
慌ててる割に、正確に掌底を俺の溝に叩き込んだ飛龍さんは、俺がむせてる間に拳銃を奪い取った。
「な、何やってんのよ⁉？バカなの⁉？死ぬの⁉？」
「ああ死ぬさ！死なせろおおおおおお‼？」
俺はこう見えて実験の訓練は得意だった。飛龍さんの手首に手刀を打ち込むと、拳銃を奪い返し、自分の眉間に当てた。
その俺の手首を飛龍さんは掴んだが、俺はそれを回避した。
「っ！チキンのくせに意外な武力を……！」
「俺は、生きるべき人間じゃないんだあああああ‼？」
「落ち着かないと昨日の事、憲兵に言うわよ」
言われて俺は拳銃を窓から投げ捨てて、正座して待機した。
……あれっ？ていうか、憲兵に言ってなかったの？
「もうっ！そんな簡単に死のうとしちゃダメです！」
俺の疑問を説明する様子もなく、飛龍さんは「めっ」と俺のおでこを軽く叩いた。
「……あの、え？憲兵に言ってないんですか？」
「言いませんよ。……昨日は、私から誘ったんですから」
「……はっ？」
こいつ今なんつった？
「もしかして、昨日のこと何も覚えてないんですか？」
「……すみません」
「いえ、それなら説明しますね」
「お願いします」
「まず、先に酔ったのは提督です。で、私が部屋まで送ってあげたんですけど、その……私もかなり酔ってて、それで提督の酔ってた時の顔が、私の外見の男性のタイプにどストライクしてて……」
「で、誘った、と？」
聞くと、顔を赤くして頷いた。

「それでも、誘いに乗った俺が悪いです。死にます」
「お、落ち着きなさいだから！わ、私は気にしてませんし、むしろ、その……」
「？　むしろ？」
「な、なんでもないです！と、とにかく今回のことはもう忘れましょう！それがお互いのためです！」
……でも、責任は取らなきゃダメだろ。俺は人として最低な事をしたんだぞ。何かしらの形で責任とらないと……。何かしらの、責任で……。
俺は覚悟を決めると、深呼吸をして言った。
「飛龍さん」
「な、なんですか？」
「結婚してください」
「はっ⁉？」
顔を真っ赤にする飛龍さんに俺は続けた。
「あんな事した手前、何も責任とらないわけにはいきません。俺の自己責任かもしれませんが、必ず幸せにすると誓います」
正直、振られる予定だ。さっきのプロポーズは「提督にヤリ逃げされた」とか噂ばら撒かれないためのプロポーズだ。これはこれで「なんかいきなりプロポーズされたんだけどｗｗｗ」とかなるかもしれないが、飛龍さんに限ってそれはない。人の悪口を言うような人じゃないし。伊達に、うちの最古参空母はやってない。
「……あの、提督」
「な、なんでせう」
「プロポーズするなら、渡すものがあるんじゃありませんか？」
「……ファーストキス？」
「え、その発想はキモいです。ていうか、昨日の夜の時点で既にファーストじゃないし」
「……」
キモいって、俺。
「指輪ですよ、指輪」

「あー……ありますよ」
「本当に⁉？」
俺はゴソゴソと引き出しの中を引っ掻き回した。で、ガチャポンのカプセルを取り出して開けた。中にあるのは、ボンゴレリングのオモチャだ。
「……なにこれ」
「知らない？リボーン」
「ふざけてんの？」
「……ごめんなさい」
やっぱダメか……。
「まぁ、今はアレで良いです、ケッコンカッコカリの指輪」
「そんなので良いんですか？ていうか、練度足ります？」
「知らないんですか？私、ここ最近撫でて欲しくてずっとＭＶＰ獲ってたんですよ？」
「……」
ていうか何？この人、結婚したいの？
「……あの、嫌なら断ってくれて良いんですけど」
「嫌じゃありませんよ。そうすれば、提督は自殺をやめてくれるんでしょ？」
「いや、まぁそうだけど」
「じゃあ、よろしくお願いします」
と、いうわけで、俺は飛龍さんと結婚した。

結婚した。
第５話　なんだこいつら

なんか、こう……なんやかんやで飛龍さんと結婚の約束をしてしまったが、余り関係は変わらなかった。いつものように一緒に仕事して、ＭＶＰ獲ったら頭撫でて、仕事終わったらお互いの部屋に帰るだけ。

ま、別に愛がないわけではないが、キッカケはヤッちまった責任から結婚したわけだから当然と言えば当然かもしれない。

「あー……仕事疲れた……，。ずっと座ってると肩凝るわ……」

現在、飛龍さんは挑まれた演習中。なので、俺は一人だった。ふーむ……少し息抜きでもするか。

懐から拳銃を抜いた。それで、引き出しから明石さん特製の的を取り出し、窓にぶら下げて、狙って撃ち抜いた。窓に的をぶら下げ……ぷっ。ちなみに、あの的はどんなに撃っても、多少傷付く程度で穴は空かない。

で、しばらく銃の練習をした。以前、銃の腕だけは負けないと思っていたのに、俺より上手い奴がいて、それ以来ずっと練習している。なんか最近、噂で戦艦大和と付き合ってるらしい。そこは、俺も飛龍さんと交際してるのでイーブンである。むしろ、こっちの方が上生である。ていうか、あのコミュ障が良く誰かと付き合えたな……。

そんな事を思いながら、パンッパンッと射撃してると、コンコンとノックの音が聞こえた。俺は拳銃を懐にしまい、「どーぞ」と返事した。

「失礼します」

入って来たのは、明石さんだった。

「……なんか、銃声みたいなの聞こえましたけど。何かありました？」

「あ、いや、ちょっとね。それより、どうかしました？」

「はい。提督に頼まれてたもの、出来ましたよ」
「マジか！」
明石さんは、俺に銃を渡した。ドミネーターみたいな形の拳銃で、音を消すためにお願いしたものである。
「でも、なんでこんなものを？飛龍さんにバレたら怒られますよ？」
「バレないために作っていただいたんです」
俺は気弱だ。だが、我慢が出来ない奴でもある。前に拳銃の練習を執務室でしていたら、「音がうるさい」「というか、外したら壁が傷付く」「危ない」と飛龍さんに怒られてしまった。やるなら演習場に来い、と。
だが、演習場だと艦娘達が文字通り軍艦の主砲をぶっ放しているのに、俺だけクラッカーみたいな音でパンパンやるのはなんか恥ずかしいし、何より行くのが面倒だ。
だから、バレないように練習する事にした。幸い、明石さんは「新しい発明ができる！」とのことで、鋼材９００と引き換えにノリノリで的と銃を作ってくれた。
さっきまで使ってた銃は試作段階で、部屋の前まで音が響いてしまう。今回のはそれを元に作った、いわば第二形態だ。
「では、早速試し撃ちしましょう！」
「はい！」
二人してノリノリで、的に銃を構えた。その直後、的の後ろの窓から、プウウウンと艦載機が飛んで来た。操縦してる妖精さんはマイクに何か言った直後、何処かに飛んでってしまった。
「……提督」
「うん。今の」
「飛龍さんの」
「でしょうね」
顔を見合わせると、俺は拳銃を懐にしまい、的を引き出しにしまうと、明石さんと部屋を出て逃げようとした。
扉を開けると、飛龍さんが待っていた。
「二人とも？」

「……」
「少し、お話良いですか？」
俺と明石さんは、その場……執務室前の廊下で正座させられた。
約一時間に渡る説教の後、飛龍さんは執務室の中に入って行った。
その背中を見ながら、明石さんに耳打ちした。
「……次は窓にカーテン付けましょう」
「そうですね」
懲りなかった。

＋＋＋＋

明石さんが帰り、俺は飛龍さんと仕事再開。まぁ、もうほとんど終わってるんだけどね。
「提督」
「んっ？」
「その、先程の演習で私、ＭＶＰを獲りまして……」
「ああ、お疲れ様です」
「……」
無言で頭を差し出して来る飛龍さん。俺はその頭を撫でた。「んふっ……」と、声を必死に押し殺す声を漏らしながら、飛龍さんは俺に段々と寄りかかって来る。
「……」
「……あの、飛龍さん」
「なにー？」
我慢してる割にリラックスしてんなこの人……。まぁ、良いけど。
「そんなに気持ち良いですか？」
「もう最高よ……」
「そ、そうすか……」
「なんていうか……人に甘えるってこんな感じなんだなぁって、お父さんがいたらこんな感じなのかなぁって、そんな感じです」
「……ふぅーん」

俺には、お父さんがいるからその気持ちは理解できない。理解できないはずなのに、何となく頷けてしまった。特に、飛龍さんは最初に来た空母だから、尚更甘える事は出来なかったんだろう。
「……ま、そういう事なら俺を枕にするなり好きに使ってください」
「……提督、その言い方は少し卑猥です」
「そういう風に受け取るからだろムッツリ」
「んなっ……！ち、違います！」
うおっ、やべっ。怒った。沈静化しないと。
「はいはい。ムッツリな飛龍ちゃんは大人しくしててくださいねー」
「ち、違うってば……！」
ナデナデ。
「このっ……！提督……！」
ナデナデ。
「んぐっ……ふにゅうっ……」
ナデナデ。
「ふにゃあぁぁぁぁぁ～……」
俺のナデナデ怖い。飛龍さんはその場から崩れ落ちて、俺の膝の上に頭を置いた。
ていうか、その体勢太ももにおっぱいが少し当たるんだけど。天然痴女にも程があるでしょこの人。しかも可愛いし。残りわずかとはいえ、仕事になんねーよこれじゃ。
「あの、飛龍さん」
「なんですかぁー？」
「……」
蕩けた声でそう言われてしまった。
……ま、いっか。もう少しこのままでも。
俺は引き続き、飛龍さんの頭を撫でた。しばらく撫でながら仕事をしてると、紙を落としてしまった。ヒラリヒラリと不規則な動きで落ちると、紙は足の横に来た。
俺はそれを拾おうと少し屈んだ。すると、飛龍さんの真っ赤になった顔が見えた。

「……恥ずかしがるならやらなきゃ良いのに」
「ーっ⁉?」
小声で呟くと、聞こえてたのか飛龍さんがこっちをキッと睨んだ。さっきと違って顔が真っ赤なので、まるで怖くない。
「は、恥ずかしがってなんかいません！」
「はいはい。良い子だからもう少し待っててねー」
「ちょっと！子供扱いしないでよ！」
「パパの仕事が終わるまでもう少し待っててねー」
「誰がパパよ⁉?」
ギュウウウッと太ももを抓られた。
「いだだだっ⁉?おまっ、何すんだよ！」
「ど、どうせなら……！旦那って、言ってよ……」
顔を赤らめながら、目をそらす飛龍さん。こ、この人はよくそういう事言えるなぁ……。恥ずかしくないのかな。まぁ、恥ずかしさってのは共有すれば恥ずかしくなくなるものだ。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というのは車に轢かれる外壁的な意味ではなく、みんなやってるから怖くない的な意味だ。それと同じ原理だ。
「はいはい。甘えん坊な奥さんですね」
「うるさい、バカ」
俺は飛龍さんの頭を撫でながら、仕事を終わらせた。

第6話　いくつになってもお化けは怖い。

夜中。眠れない。なんでだ？すごく眠れない。なんか、こう……眠れない。なんでだろ。なんかあったっけか。紅茶飲み過ぎたかな。

「……おしっこしたい」

でも、外出るのダルい。寒いし。面倒臭い。何より、こんな夜中に外出たらお化け出そうじゃん。深海棲艦に艦娘が存在するなら、お化けがいてもおかしくない。

あー、ダメだ。考えるな。小心者は、いつどこにお化けが出て来るかを考えるプロだ。それで自分でビビってるんだから世話ないわ。

ダァーくそっ！良い歳して一人で夜中にトイレにも行かねーのか俺は！しっかりしろ！お化けなんていてもスマホのライトで倒せんだよ！

「……行くか」

俺は布団から出て、スマホと懐中電灯とレーザーポインターと閃光弾と光るライトセーバーのオモチャと発光塗料入り水鉄砲を持って部屋を出た。

そーっと、足を忍ばせて男子トイレに向かう。つーか、そもそもなんで男子トイレが俺の部屋にねーんだよ。男子俺しかいねーだろうが。

ライトセーバーを腰に、その他のものはポケットやウエストポーチに突っ込み、懐中電灯だけ手に持って歩いた。

窓からは満月が光を照らしていた。月光、という言葉は厨二心をすごく擽ぐるが、実際の所明かりが月光のみだと非常に怖い。俺もう泣きそうだし。

「……もう立ちションで良いかな」

うん、そうしよ。どうせみんな寝てるし。窓から外に出て、壁に立ちションしよう。

俺はそう決めて、窓を開けて出ると、ライトセーバーを置いてパジャマとパンツを少し下ろした。念の為、発光塗料入り水鉄砲と閃光

弾以外のライトというライトを全て照らし、俺の場所だけめっちゃ輝いてて、それで立ちションしてんだから、もうほとんど露出魔だが、命には変えられない。お化けに呪われるよりマシだ。
それに、この時間帯に艦娘なんて通らないだろうし……。
「悪霊たいさーん‼?」
「ふぬおおおおおおおおおおおお⁉?⁉?⁉?」
突然、目の前の窓が割れて、拳が飛んで来て、俺は首だけ曲げてギリギリ回避した。今避けれたのはほぼほぼ偶然だった。
「へ……?て、提督……?」
「は、榛名さん……?」
パンチをかまして来たのは榛名さんだった。
「も、申し訳ありません‼?すごく光ってたから、お化けかと思って……!」
「う、うん。それは良いんだけどね」
「ガラスとか刺さってませんか⁉?お怪我は……」
「あの、榛名さん」
改めて、という感じで名前を呼ぶと、榛名さんはとりあえず静かになった。
「あまり、見ないでくれません?」
俺、立ちションなう。
榛名さんもようやく気付いたのか、顔を真っ赤に染めて手で覆った。
「いっ……いっ……」
あ、これはダメだ。口が悲鳴の形になってる。
「いいいやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
2発目は避けられなかった。顔面に戦艦のパンチが直撃し、空中で1回転半して落下した。
逃げ出す榛名さんと、今の悲鳴で明かりがついて行く鎮守府。薄れゆく意識の中、間違いなく俺は気絶すると悟ったので、とりあえずズポンとパンツを履いてから気絶した。ぐふっ。

＋＋＋＋

目を覚ますと、俺の部屋の天井だった。
「んっ……」
「あ、目が覚めた？」
聞き覚えのあるフランクな声。飛龍さんの声だ。
「ひ、飛龍さん……？」
「榛名の悲鳴で目が覚めて、やけに明るい所あったから行ったら、提督が倒れてたのよ。だから、とりあえず私達の部屋に運んで来たの」
「そうですか……。面倒かけてすいません……」
「いいのよ、別に」
俺は謝りながら、窓の外を見た。まだ夜中だ。俺が倒れてからそんなに時間経ってないのか……。
すると、「さて、」と仕切り直すような声と共に、飛龍さんが布団の中に手を入れて、俺の股間をズボン越しに握った。何してんだよコイツ、と思った直後、その手にすごい力が入れられた。
「いだだだだ‼？拠げる！魔羅拠げる‼？」
「なーんで、夜中にライトまみれで榛名に悲鳴上げられるような事になったのかしら？」
「せ、説明する！するから、拠ごうとするな‼？」
すると、飛龍さんは手の力を抜いた。だが、股間の上から手を動かさない。
「……あの、手……」
「離さないわよ。話すまで離さない」
「スケベ」
「何か言った？」
「すいませんでしたあああああ‼？」
ていうか、少しこの人酔ってね？ほんのりと顔赤いし、今夜も飲んでたのかよ……。
とりあえず、説明しようと口を開きかけた所で、俺の身体は止まった。ど、どうしよう……夜中に一人でトイレにも行けなくて立ちショ

ンしてた、とは言えねーよ。
「あー……トイレに行って、念のためライト持ってったんです。そしたら、榛名さんとすれ違ったから、少し悪戯したら、高速戦艦パンチ喰らった」
　立ちションの事は伏せて伝えた。
「……なんであんなライト持ってってたのよ。ていうか、レーザーポインターって持って行く意味あったの？」
「……まぁ、色々あったんですよ」
「あ、もしかして、怖かったんでしょ」
「……」
　俺は顔を逸らした。まぁ、立ちションがバレるよりマシだ。
「ふぅーん？提督も可愛いところあるじゃん？」
　ニヤニヤしながら、俺の頭を撫でる飛龍さん。まぁ良いや、この人は酔ってる時の記憶残るタイプだから、今の態度を明日になって全力で後悔する未来が見える。
「で、大丈夫なの？」
「何が」
「さっきトイレに行こうとして倒れたって言ってたじゃない。一緒に行ってあげようか？」
「あー……」
　ここで行かなきゃ怪しまれるな。飛龍さんは多分、お化けとか信じてないし、怖がる必要もないだろう。
「……誰にも言うなよ」
「分かってますって！」
　俺は飛龍さんと二人で部屋を出て、トイレに向かった。
　さっきまでおぞましく感じた月光も、二人で歩くだけなら良い感じの月明かりに感じた。念の為、スタングレネードと発光塗料入り水鉄砲だけポケットに入ってるし、いざという時は問題ないだろう。
「……」
　ふと飛龍さんを見ると、不機嫌そうな顔をしていた。なんで怒ってるんだろうか、俺なんかしたかな。

「……なんで、私の腕に抱きつかないの」
「は？」
「なんでよ！お化けが怖いのになんで私の腕に引っ付きながら屁っ放り腰になって涙目でついて来ないの⁉？」
「いや、だって二人いれば怖くねーし」
「怖がってよ！もっと怖がってよ！」
こいつ酔うとめんどくせーな。なんなんだよマジで。
俺は無視して飛龍さんと歩いた。で、トイレに到着。
「待っててよ。絶対先に戻んないでよ」
「分かってますよーだ」
あっかんべーってやるな、可愛いだろうが。
トイレに入って、さっさと用を足した。まぁ、立ちションしたばかりで出ないから、発光塗料入り水鉄砲で音だけ誤魔化してるけど。
流して、手を洗ってトイレを出ると目の前に貞子がいた。
「」
「う、うらめしｙ……」
直後、俺はポケットのスタングレネードを叩きつけ、発光塗料入り水鉄砲を貞子に乱射した。
「ギャッ……⁉？ちょっ……なっ⁉？」
「で、出たあああああああああああ‼？」
「まっ！ていと……！ま、前が見えない……⁉？」

＋＋＋＋

俺は部屋の中に駆け込んだ。左胸を抑えて、息を整える。で、出やがった……！マジで、出やがった。まさか、スタングレネードが有効とは思わなかったけど。……ふぅ、よし落ち着いたぞ。寝よう。明日になったら、陰陽師を呼ぼう。
「……あり？飛龍さん？」
やばい……！置いて来てしまった。このままじゃ飛龍さんが危ない。でもまたお化けのいる所に戻るのか……？

いや、ダメだ。飛龍さんを助けに行かないと！俺は発光塗料入り水鉄砲を持って、部屋を飛び出した。
トイレの前まで大慌てで駆け付けると、発光塗料塗れの飛龍さんが超泣いてた。近くに、カツラが落ちている。
「ううっ……ぐすっ……ひぐっ……」
「……」
なんで飛龍さんに発光塗料が？俺はさっきお化けに撃ったはずだ。
……はっ、もしかして！
「飛龍さんって、お化けだったんですか？」
「なんでそうなるのよ‼？」
すっかり酔いが覚めた状態の飛龍さんが俺に怒鳴った。
「何するんですかいきなり‼？グレネードで目は見えなくなるし、変な液体掛けられるし最悪よ‼？」
「……？　俺は貞子に撃ったんですよ？」
「それ私よ‼？」
「貞子の正体って飛龍さんだったんですか⁉？」
「貞子のカツラを被ってたのが私なだけよ‼？てか、いい加減察しなさいよバカ‼？」
……ああ、そういうこと。つまり、俺を脅かそうとしたわけだ。
「す、すいません」
「もう……最悪よ……」
「だ、大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃないわよ……。まだ視界戻らないんだもん……」
「……」
実際、お互い様な気もするけど、俺が泣かしたのは事実だ。
俺は飛龍さんに肩を貸した。
「と、とりあえず部屋に戻りましょう」
「……おんぶ」
「はいはい」
「……お風呂」
「はっ？」

「……こんな変な液体塗れは気持ち悪いから、お風呂」
「え、でも目ぇ見えないんですよね？」
「……」
「飛龍さん？」
「……一緒に入って」
「……マジ？」
「入ってくれないと、提督に汚されたって明日大声で叫ぶから」
「わ、分かったよ……。何処の？」
「提督の部屋のに決まってんじゃん」
　飛龍さんをおんぶして、部屋に戻った。そのまま、風呂場に直行した。
「……せて」
「はっ？」
「……脱がせて」
「いや、目見えなくても脱ぐくらいできるでしょ」
「いいから。叫ぶよ」
「わ、わかりましたよ……！」
　いや、わかるなよ。良いのか、俺。確かに飛龍さんとは結婚するが、そんな立場を利用して脱がすなんてこと。でも向こうから脱がせてと言って来たし。しかしそれでは言質を取って服を剥ごうとしてる最低な奴に……いや、でも、しかし。
「早く！」
「はい」
　怒られたので、飛龍さんの服に手を掛けた。まずは袴を脱がせると、続いて上半身に手を掛けた。

第7話　マゾ

服を全部脱がして、俺は飛龍さんと入浴。まぁ、俺は服着てるけど。見られてないとは言え、人の前に裸になるのは恥ずかしいし、俺は風呂に入る必要ない。後は、理性が保てばそれで良い。

そう思っていた時期が私にもありました！現在、腕まくりに膝まくりで飛龍さんの頭を洗っています。

お互いに一言も話さず。鏡に映る飛龍さんは、両手を内股になってる膝の間にしまって、顔を真っ赤にしたまま俯いていた。

うーん……なんだろう、何を今更恥ずかしがってるんだろう。いや、可愛いんだけど、なんかそれ以前になんか犯罪臭が……。

いやいやいやいや、落ち着けよ俺。付き合ってるなら風呂くらい普通に入るだろ。というか、誘って来たのは飛龍さんだ。俺が誘いに乗らなければ問題ないし、俺は今酒を飲んでない。アルコールさえなければ俺が襲うようなことはない。鋼の理性だぞ。さっきから、股間は超反応してるけど。

「……」

「……」

「……提督」

「は、はい？」

「シャンプー、もういい」

「あ、了解です。じゃ、俺は外で」

「次、身体ね」

「ふぁっ⁉？か、身体⁉？」

「いいからまずはシャンプー流してよ……」

「は、はい……」

俺はシャワーをとって、飛龍さんを頭から洗い流した。シャンプーを流し切ると、俺はボディーソープに手を伸ばした。

タオルにむにゅーっとボディーソープを付けると、「あっ、待った！」と飛龍さんが声をあげた。

「えっ、何」
「その前に、リンス」
「えっ、ボディーソープ、タオルにつけちゃったんですけど……」
「……じゃあ、身体洗ってからで良いよ」
「は、はい」
大丈夫、身体洗うというのはつまり、背中を流せという事だ。
俺はタオルを泡立てて、飛龍さんの背中に当てた。おお……なんていうか、柔らかい背中だな。女性の背中って柔らかいんだ。
ゴシッゴシッと擦ってる間も、飛龍さんは無言だった。
背中を終えて、俺はタオルを飛龍さんの肩に掛けた。
「よ、よし。終わりました」
「……？まだ、背中しか洗ってないじゃん」
「えっ」
「早く洗ってよ」
「いや、えっ……胸とかも？」
「い、言わせないでよ……！前見えないんだから仕方ないじゃない……」
「はい、すみません」
マジかよこの人……。もしかして、まだ酔ってんのか？まぁ、言われたからやるけども。俺はタオルでまずは腕からいった。ていうか何だこのプレイ。一時間いくら？
両腕を終えると、飛龍さんは脚を伸ばした。脚を洗えって事か？でもね、そういう風に伸ばすと、股間が丸見えだからね。少しは自制してくださいね。ていうか、生えてるんだ、毛。
まぁ、足を洗えって時点で見られる事前提なんだろうけど。落ち着けよ、俺の理性。
足を洗い始めた。引き締まってるのに柔らかい脚をゴシゴシと洗う。指先から太腿に向かう度に、「んんっ」と色っぽい吐息が漏れていた。それ本当にやめて。
「っ！」
め、目の前に飛龍さんの女性器が……!!？

イカンイカンイカン！落ち着けよ俺！考えるな、心を無にしろ。我、無我の境地也……!!？

「……お、終わりました」

終わった……。俺は息を吐いた。すると、飛龍さんは足を内股に戻すと、胸を張った。大きいにもほどがある胸が、俺の目の前に出て来る。

これ以上は無理だ。鋼の理性にも限界がある。だが、鋼のチキンハートはすでに限界突破していた。この前の失敗はしない。まずは事実確認だ。

「……飛龍さん」

「何」

「挑発してませんか」

聞くと、飛龍さんは黙り込んだ後、ボソボソと呟くように言った。

「……二人でお風呂の時点で、気付きなさいよ」

「悪かったですね。もし、違ったら怖いので確認しないで実行はできない人なんです」

「少しは察することも大切だと思うけど」

「本当は目も見えてるんでしょ？」

「……洋服脱いでから少しずつ回復してた」

「ていうか、なんかあったんですか？急にこんな風に誘うなんて」

「……提督に視界を奪われてから変な液体掛けられた時に、その……若干興奮して」

「……」

「……私、少しＭっ気があったみたい……」

顔を真っ赤にして性癖を告白された。この人意外とスケベだ。

「……後は、その……勢いとか、深夜テンションとか、酔いとか、……みゅ、ムラムラとか……」

「……」

俺は「で、」と仕切り直した。なんか俺まで変なテンションになって来た。

「その性癖を俺に言ってどうされたいんですか？」

「……りやり」
「えっ？聞こえないんですけど」
「……無理矢理、犯されたい、です……」
顔を真っ赤にしながら、俯いて飛龍さんは言った。俺は理性をブチ破った。

＋＋＋＋

湯船。白く濁った液体をシャワーで流したら、俺と飛龍さんは湯船に浸かった。俺の足の間で、正気に戻った飛龍さんは縮こまっている。
「うう……なんであんなこと言っちゃったんだろう……」
「ど、ドンマイです……」
「どんまいじゃないよ……止めてよぅ……」
「いや、あまりにもエロ可愛かったんで」
お湯の中に顔を埋める飛龍さん。この人、普段とエロスイッチＯＮ状態のギャップが可愛すぎる。
「そんな恥ずかしがる事ないですよ。もう知っちゃってるんですから」
「知られたから恥ずかしがってるんです！……はぁ、まさか私がＭだったなんて……」
「もう少し焦らしたほうが良かったですか？」
「そういう事言わなくて良いの！……でも、次からお願い」
お願いするのかよ。しかしまぁ、なんというか……俺何してんだろうな。なんか流れで色々ヤッちまったけど、こんな事して良かったんかな。まぁ、過去のことを気にしても仕方ないけど。
「提督」
「何ですか？」
「私の事、言わないでくださいね」
「私の事？」
「だから、その……性癖とか」

「ああ。いや、大丈夫。甘えん坊でドMな性癖だ、なんて誰にも言いませんよ」
「わ、私にも言わないで下さい！」
「はいはい。甘えん坊でいじめられっ子の飛龍ちゃん」
「これ、捩ぎますよ」
「そしたら、ドM趣味に付き合えなくなりますけど」
「……やっぱり口じゃ勝てないかぁ」
　飛龍さんは俺の胸の上に頭を置いた。その頭を俺は撫でた。
「しかし、前回の記憶がないから、俺的には初めてシた感じなんですけど」
「んっ？」
「女性の中ってすごいあったかいんですね。それでもって、すごい締め付けというか、柔らかいというか……」
「ふんっ！」
「痛っ⁉？」
「余計な事言わなくて良いの」
「いや、でも気持ち良かったし別にそんな気にしなくて」
「怒るわよ」
「ごめんなさい」
　……んっ、なんか頭がぼーっとして来た。
「すいません、のぼせそうなんで俺出ますね」
「あ、じゃあ私も」
　風呂から上がった。
　身体を拭いて、パジャマに着替えると、飛龍さんの服が発光塗料塗れになってるのに気付き、俺のジャージを貸した。チャックが胸で上まで閉まらなくて、すごくエロい感じになってしまったが、この際良いや。
　二人で布団の中に入った。一人用の布団なので、かなり狭いけど、まぁその分、飛龍さんとくっつけるので良いだろう。
「なんか、修学旅行みたいですね」
「何よそれ」

「学生の間に一回は行く大規模な旅行です。京都とか奈良とか沖縄とか……場所によっては海外に行くところもありますね」
「ふうん、沖縄、かぁ……」
「行きたいんですか？」
「少し、興味あるけど……」
「じゃあ、今度行きます？」
「良いの？」
「休暇くらい取れるでしょ。後の事は蒼龍さんに任せれば大丈夫です。書類仕事は……俺なら5日分くらいなら1日で片付けられますし」
「……じゃあ、行こっか」
「ウィッス」
さて、寝るか……。
つーか、良い加減眠いわ……。深夜のたった数時間ですごい色々あったからなぁ……。早く、寝ないと……。
「提督」
「はい？」
なんだよ、まだなんかあんのかよ。もう寝させてくれよ。
「明日からさ、ここに住んでも良い？」
「……はっ？」
こいつ今なんて言った？
「だ、だから！明日からここに住むのよ！そ、その方が……いつでも甘えられて良いじゃない」
「……なんか、毎日誘って来られそうだから嫌だ」
「そ、そんな欲求不満に見える⁉？」
「2回とも誘って来たの飛龍さんじゃないですか」
「っ……！さ、誘わないから！三日に一回は！」
「そういう事、するとしても一週間に一回」
「えっ……」
「えっ……じゃないから。じゃないと許可しない」
「……わ、分かりましたよ」

「でも、蒼龍さんが一人部屋になるのは少し可哀想な気もしますけど」
「一航戦か五航戦の部屋にお願いすれば良いじゃない」
「そんな簡単に決めて良いんですか？人間関係ってもっと複雑なものでしょう」
「この鎮守府の鑑娘は、少なくともみんな仲良いですよ」
「……加賀と瑞鶴、川内と瑞鶴、北上と駆逐」
「……一部を除いて」
「はぁ……まぁ、分かりましたよ」
と、いうわけで、飛龍さんと同じ部屋に住むことになった。

第８話　料理が出来て人間が出来てない。

翌日、目を覚ますと、当然というか何というか、飛龍さんが寝ていた。服は着ている。なんか深夜テンションで色々言っちゃった気がするけど、うん。この際、忘れよう。

先に起きて、飛龍さんが寝てる間に着替えた。起こすのも悪いし、さっさと出て朝飯にした。

部屋の棚にあるカップ麺を取って、お湯を沸かして注いだ。

「……ふわぁ……」

欠伸する声が聞こえた。飛龍さんが目を覚ましたようだ。

「んっ……ていとく？おはようございます……」

「おはようございます。朝飯食べます？」

「提督が作ってくれるの？」

「いや、カップ麺ですけど」

「……今なんて？」

「カップ麺」

「……」

え、何その真顔。超怖いんだけど。

「もしかして、毎朝カップ麺食べてるの？」

「うん。料理は納豆ご飯卵かけご飯お茶漬けしか出来ないから。作るの面倒臭いし良いかなって」

「ダメよ！そういう身体の悪いものを食べてちゃ！ていうかそれ全部料理じゃないし！」

「酒も体に悪いけど、飛龍さん毎日飲んでるじゃないですか」

「毎日は飲んでないわよ！カップ麺なんて身体の害でしかないのよ⁉？」

「俺の得意料理を馬鹿にするなよ！」

「料理じゃないわよ！お湯入れるだけなんて！」

くっ……この人は！意外と嫁っぽいぞ、こういう所……！

「そこまで言うからには、飛龍さんは料理できるんですよね？」

「うっ……！で、出来るわよ！」
「なら、朝食作ってもらえますか？」
「そ、それとこれとは話が別でしょ⁉？」
「え、旦那に朝食作りたくないんですか……？」
「うぐっ……」
　論点をずらしてこれ以上の口喧嘩を回避する。完璧過ぎる。と、思ったら飛龍さんはなんか大量に汗を流していた。
「お、お昼……」
「へっ？」
「お昼まで、待って！」
「お昼作ってくれるんですか？」
「う、うん……」
　おお、思わぬ棚ぼた。ラッキー。
「あざーっす！……あ、３分経った」
「ちょっ、カップ麺食べちゃダメだってばだから！」
「お湯入れちゃったもんは仕方ないでしょー」
　俺は蓋を剥がして麺を啜った。カップヌードルはシーフードが最高。
「あ、あのさ……」
「なんですか？」
「一応聞くけど、好きな食べ物は？」
「ラーメン」
「それ以外」
「……油そば？」
「何それ？」
「お前油そば知らないの？人生の１２０％損してるよ」
「１００％超えてるし」
「まぁ、今度連れて行ってあげますよ」
「本当に⁉？」
「嘘だったらぬか喜びさせてるクズじゃん俺」
「やったね！……って、違う！それ以外の好物！」

「それ以外、ねぇ……」
なんだろうな……。ラーメンと油そばがこの世の最強だから考えたこともないわ。
「あ、強いて言うならエビ天かなぁ」
「……エビ天……分かった」
「あと野菜の天ぷらとか？」
「意外とベジタリアンなんだ」
「健康第一だからな」
「でも、分かりました。お昼、首を洗って待っててよね！」
「決闘？」
飛龍さんは元気に部屋から出て行った。おい、お前秘書艦の仕事は？

＋＋＋＋

午前中に仕事を終えるという、我ながら驚異的なことを成し遂げた。何故、驚異的かというと、午後の演習のレポートも終わらせたからである。仕方ないね。
で、昼休み。俺は少しワクワクしながら飛龍さんのお昼を待った。多分、好物を聞いて来た辺り、天ぷらが来るんだろう。……腹減った。
すると、コンコンとノックの音が聞こえた。
「はい」
「て、提督……」
飛龍さんが今にも泣き出しそうな顔で入って来た。
「ああ、飛龍さん？」
「提督ぅ……」
「えっ、どうかしました？」
「……ごめん、提督……」
飛龍さんの手元に乗せられた天ぷらは、爆心地みたいになっていた。なんでそうなったんだよ……。

「うぇ……うええっ……」
「ちょっ、泣かないでくださいよ！……あーえっと、コーヒー飲みます？」
「……グスッ……頭ナデナデがいい……」
「はいはい……」
　飛龍さんの前にしゃがんで頭を撫でた。すると、飛龍さんは俺の胸に頭を置いて、なんとか息を整え始めた。
「……大丈夫ですか？」
「もっと撫でて」
「……」
　ほんと可愛いなこの子。っと、いかんな。飛龍さんは泣いてるんだし、ほっこりしてる場合じゃないぞ。
「ごめん……提督。ほんとは、余り料理は得意じゃないの……タコワサしか作れないの」
　それはそれですごいな……。
「だけど、見え張っちゃって……蒼龍が教えてくれたんだけど、焦がしちゃって……蒼龍は、このまま持ってけって言ったんですけど……」
「……」
　食べるべき、なんだろうな。俺は皿と箸を受け取ると、深呼吸した。正直、食べるのは怖いけど、食べないで飛龍さんを傷つける方が怖い。
　俺は天ぷらを箸で摘んだ。
「た、食べるの？」
「食材は無駄にできないでしょ。いただきます」
　一口食べた。口の中に柔らかいのか硬いのかわからない、けど確かな炭の味が広がった。
「……うん、なんていうか、食べる前に遺書書けば、心置き無く食べられる感じ」
「コメントが微妙過ぎるよ！普通に不味いって言われた方がよっぽどマシだよ！」
　そ、そうか。少し気を使い過ぎた？でも、美味いって嘘つくよりマ

シだと思ったんだけど。
「ご、ごめんね……。変なもの食べさせて」
「食え、とは言われてませんから。俺が勝手に食べただけですよ」
「……前々から思ってたけど、提督って意外と優しいよね。普通に気が回るっていうか……」
「うるさいです。それより、ちょっと良いですか？」
「？何？」
「や、ついて来て」
俺は飛龍さんを連れて自室に入った。布団を干して、ちゃぶ台を出して、冷蔵庫からコーラを出すと、コップに注いで飛龍さんの前に置いた。
「？　何？何なの？」
「ちょっと待ってて」
冷蔵庫から海老やレンコンとかを取り出した。久し振りの料理タイムだ。
完成し、タウンワークの上に揚げ物を置いて、そのまま皿に乗せた。それを飛龍さんの前に置いた。
「んっ」
「えっ……これ、提督が作ったの？」
「今、俺が台所で何してたと」
「お、美味しそう……っていうか料理できるじゃん！」
「……面倒臭いから朝飯作らないなんて知られたら怒られると思って」
「その件は後でお説教だから」
しかも、料理にハマった理由が食戟のソーマなんだなぁ。
「い、いただきます……」
飛龍さんは手を合わせると、箸を取って天ぷらを摘んだ。一口かじると、すごく幸せそうな表情を浮かべた。
「んっ……美味ぁ……！」
「知ってる」
「……これだけできるのにカップ麺とか死ねば良いのに……」

「お前今なんつった？」
「美味ぁ」
「いや、美味ぁ、じゃなくて」
こいつ……。まぁいっか。幸せそうだし。俺は冷蔵庫からアイスを取り出して、頬張った。
最初は美味そうに天ぷらを食べてた飛龍さんだったが、なんか段々と元気が無くなっていった。
「……どうかしました？」
「……いや、旦那より料理のできない私ってなんなのかなって思って……」
「まぁ、人生経験が違うから仕方ないですよ」
いや年齢は向こうのが上だけど、俺のが人としてはたくさん生きてるからね。っと、そんな話はいいんだよ。
「で、飛龍さん」
「な、何？」
「飛龍さんがやりたいなら、良いですよ」
「！　教えてくれ……」
「はい。教えてくれるように間宮さんに頼んでみます」
「……は？」
「いやー、俺も前から自分で料理してましたけど、美味い料理を作れるようになったのって間宮さんに教わったからなんですよね。だから、飛龍さんと間宮さんに」
「提督、なんで料理できるのに毎朝インスタント食品食べてるの？」
「え？いや、なんでその話急に……説教は後でするって言っ」
「バカには説教しないと何もわからないみたいだから」
「すごい言い様ですね！」
「良いから。覚悟して」
なんか知らないけど、飛龍さんにマジで怒られた。

第9話　隠し事はいつかバレる。

「ごめん、提督。私、そろそろ弓道場行かないと」
「りょ」
　飛龍さんは部屋を出て行った。俺は部屋の扉に耳あてた。まだ足音が聞こえる。まだ……まだ……消えた！
　直後、俺はスマホでメールを送った。数秒後、明石さんがアタッシュケースを持ってやって来た。
「提督！」
「来たか！」
「例の？」
「それ！」
　直後、カーテンを閉め、窓を閉め、執務室の前の廊下の天井にカメラを設置し、パソコンを開いて監視カメラの様子を常時視察できるようにし、的を窓に掛けて、明石さんのアタッシュケースを開けた。中には拳銃が入っていた。
「……やるか」
「どうぞ！」
　的に銃を構えた直後、コンコンとノックの音が聞こえた。
　直後、俺は手首に仕込んだ糸を出して的を回収して引き出しにしまうと、銃をアタッシュケースにしまって投げ滑らせ、机の上にしまった（この間０．５秒）。
　一方、明石さんはなんか小さいチップをカーテンに投げて付着させ、リモコンのボタンを押した。直後、カーテンは全部全開になり、明石さんは最後にパソコンを閉めた（この間０．７秒）。
「どうぞ」
　提督が答えると、蒼龍が入って来た。
「失礼しまーす……って、明石もいたんだ？」
「提督が開発でご相談があると仰られて」
「ふーん……。もしかして、忙しかった？」

「いや、全然？」
「声を揃えて⁉？」
蒼龍は「別に良いけど……」と呟くと、俺に聞いた。
「飛龍いる？」
「今さっき出て行ったよ」
「あー入れ違ったかー。ごめんね邪魔しちゃって」
「いや、明石さんも今来たところだから」
「浮気しちゃダメだぞ？」
「わーってるよ」
蒼龍は部屋を出て行った。
俺と明石さんは互いにホッと息をついた。
「危なかったなーおい」
「そうですね……。ていうか、提督の機転は相変わらずですね。なんですか、さっきのスパイダーマンみたいな糸」
「あれ、夕張が作った。明石さんも、カーテンの奴すごかったじゃないですか」
「そんな事ないですよ。アレくらい誰だってできます」
「いや、少なくとも俺じゃ無理ですから」
「もう、お世辞はいいですから。早く撃ちましょうよ！」
「ああ、そうでしたね」
俺は投げたアタッシュケースから拳銃を取り出し、撃った。パシュッパシュッと音がして、的に当たっては修復される。
「相変わらず上手ですね～」
「まぁ、慣れだから。俺よりも上手い奴いるし、そいつに負けたくないんですよ」
「へぇ……そうなんですか」
「これで、ようやくまた修行できる。ありがとうございました、明石さん」
「いえいえ。また何か面白い事浮かんだら声かけて下さいね」
「うーい」
俺はそのまま拳銃の練習を続けた。

パシュッパシュッパシュッと数発撃っては、弾を装填する。意外と使いやすいなこれ。実戦でも使えるんじゃないか？まぁ、深海棲艦には効かないだろうけど。

……ま、実戦とか考えずにのんびりと趣味の一環でやるか。

「……っと、誰か来た」

パソコンに人影が見えたので、アタッシュケースを隠して拳銃を懐にしまって、的に糸を飛ばして回収した。

そこで、コンコンとノックの音が聞こえたので、リモコンでカーテンを閉めてパソコンを閉じながら「どうぞ」と答えた。

「ていとくー！かけっこしよー！」

島風だった。こいつ、少し前までノックすることすら覚えなくてマジで大変だったんだよな。

「え、やだ」

「何でよー。遊んでよー」

「駆けっこって……俺はどっちかっつーと長距離向きだから無理」

「長距離でも良いけどなー」

「何が悲しくてキロ単位の駆けっこせにゃあかんのだ」

それはもはや駆けっこではない。

でも、島風は姉妹艦いないし、構ってあげないと可哀想だよなぁ。少しは遊んでやるか。

「駆けっこは無理だけど、遊んであげるのは良いよ」

「本当⁉？」

「ああ。ちょっと待ってて」

俺はカーテンとは別のリモコンのボタンを押した。天井からスクリーンが降りて来て、床からコントローラの繋がれたゲームが出て来た。

「何これ……？」

「明石さんに頼んで（飛龍に内緒で）改造した」

「怒られるよ……？」

「バレなきゃいんだよ」

「提督ってビビリなのにそういうとこ強気だよね」

「うるせー」
つけたゲームはマリカー。島風は「おおー！」と目を輝かせていた。
「マリカー！」
「やったことあんの？」
「天津風ちゃんと一回だけ」
「ふーん。お前友達いるんだ」
「失礼だなぁ！いるよ！」
「俺の同期みたいにならないようにな」
「どーき？心臓？」
「ちげーよ」
俺は椅子を二つ用意して、その上に座った。すると、島風が俺の膝の上に乗って来た。
「うおっ」
「良いですよね？乗っても」
「まぁ、良いけど。お前のリボン邪魔で画面見えないんだけど」
「諦めてください！」
「図太いなー」
そのまま島風とゲームをした。

＋＋＋＋

二時間後くらい、島風はようやく俺の上から降りた。
「ふー！もう良いや！楽しかったー！」
「ああ。良かった」
「またね、提督！また遊んでくださいね！」
「んっ。あ、やりたかったらゲーム機持ってっても言いぞ」
「大丈夫だよ。天津風の部屋にもあるし」
「そうか。じゃあな」
島風は元気よく部屋から出ようと扉に手を掛けた。俺は伸びをしながら、今日は仕事をサボることを決めて、ソファーに座り込んだ。
その直後、「おうっ⁉？」と島風が声を漏らして立ち止まった。で、

おそるおそるといった感じでソーッと部屋から出た。
誰かいるのかな？と思ったら、飛龍さんが烈火の如く怒りを燃やして俺を睨みながら入って来た。
「……」
「あ、飛龍さん。やります？マリカー」
「やりませんっ」
「……」
「……」
「あの、何で怒ってんの？」
「……島風ちゃんと、随分仲良いんですね？」
「普通でしょ」
「膝の上にまで乗せちゃって」
「……や、だから何怒って」
「怒ってません」
……いや怒ってるだろ。俺、何かしたかな……。
「飛龍さん？」
「……つーん」
「いや、虫除けスプレー吸い込んで鼻にくる時の効果音じゃないんだから……」
なんで怒ったんだ……？島風が俺の膝の上に乗ってたのが気に食わな……ああ、そゆことか。
俺は自分の膝を叩いた。
「飛龍さんも座りますか？」
「……座る」
飛龍さんは座らずに、俺の膝に頭を置いた。
「……でて」
「は？」
「……頭、撫でて……」
「はいはい」
膝枕したまま、飛龍さんの頭を撫でてあげた。すると、トロンと気持ち良さそうな表情になる飛龍さん。

「……提督はさ、人と付き合った事あまりないでしょ」
「ない（即答）」
「やっぱり……。女の子は嫉妬深いんだから、あまり他の子とくっついちゃダメだよ」
「いや、でも島風は姉妹艦いないし、別に少しくらい」
「頭では理解してても、私はそういうの見るの嫌になっちゃうの」
「……」
　それは、申し訳ない事したかもなぁ。俺は引き続き飛龍さんの頭を撫でながら謝った。
「……すみませんね」
「いや、別に良いけど。提督が悪いわけじゃないし」
「そういえば、結局料理は教わってるんですか？」
「うん。提督に教わるの癪だから鳳翔さんに」
「なんで癪なの……」
「最近は、炒飯とかも覚えて来たんだよ」
　初歩の初歩じゃねぇか、とか言ったらまた「デリカシーない！」とか怒られそうだな。
「それは楽しみです」
「明日食べる？」
「良いんですか？」
「良いよー。……あ、でも一つ」
「？」
「明日、実は見たい映画やるんだよね」
「？　映画？」
「それ、提督の奢りで良いなら作ってあげる」
「えー……まぁいいですけど」
「やりぃ！」
「じゃ、明日ですね」
「うん。楽しみにしてる」
　俺は飛龍さんの頭を撫でて約束した。
「……ね、提督……」

「どうかしました？」
「……私、眠くなって来ちゃった……」
「良いですよ、寝ても」
「ごめん……」
「謝らないで下さい。飛龍お嬢さん」
「こ、子供、扱い……すら、にゃあ……」
　飛龍さんは目を閉じた。俺はそのまま頭を撫でながら、今日の仕事、さっさと終わらせておけば良かった、と後悔した。

第１０話　過労って怖いよね（小並感）。

ゴールデンウィークが過ぎ去り、これ真夏の日差しじゃね？と思う季節になった。そんな季節でも、仕事はある。俺は今日も今日とて、執務室でパソコンをいじっていた。

カタカタと文字を打ってると、飛龍さんが横から画面を覗き込んだ。

「ねぇ、大丈夫？」

隣の飛龍さんが声をかけて来た。

「あ？何が？」

「いや、なんかボーッとした表情で仕事してるし、最近は後段作戦終わらせて仕事も増えてたし、平気？」

「平気ですよ。何とかなる」

「……あ。誤字」

「え、どこ？」

「そこ。制空権が制空拳になってる」

「あ、ホントだ。どんな拳法だよ」

「……大丈夫？」

「ダイジョウブダイジョウブ」

「……手伝おうか？」

「平気。それより、蒼龍さんとかと遊んで来て良いですよ。春イベ、たくさん頑張ってくれましたし。はい、これ間宮アイス券」

「あ、ありがと……。ねぇ、手伝おうか？」

「いらないって」

命張って戦ってくれてたんだ。せめて事務仕事くらい俺がやらないでどうするよ。特に、飛龍さんはうちのエースだから、艦隊から外せなかったし。

「むぅ……キツかったらいつでも言ってね」

「おう」

「じゃあ、私蒼龍とアイス食べに行って来るから」

「おう」

「……あ、コーヒーだけでも淹れておいてあげようか？」
「おう」
「……ロナウジーニョ」
「おう」
　なんかさっきから話しかけて来るが、とりあえず俺は目の前の仕事から片付けていた。
　……あー、頭がボーッとする。疲れて来たな……眠いし、なんか体の節々痛い。軽く伸びをして、首をコキコキと鳴らしてると、飛龍さんがジト目で俺を睨んでいるのに気付いた。
「え、何？」
「ねぇ、本当に大丈夫なのよね？」
「だから大丈夫だって」
「……心配なんだけど」
「いや、しつけぇ。いいから休んでろよ」
　自分でも驚く程、冷たい言葉が出た。当然、飛龍さんはキッとした表情になって、俺を睨んだ。
「なっ……何よその言い方！」
「……や、悪い。ちょっと、仕事に集中してたから」
「心配してあげてるのに、なんでそんな言い方されなきゃいけないの⁉？」
　いや、だってこの仕事さっさと終わらせないと、後で上司に怒られるの俺だし。いや、提出期限まで二週間以上はあるけど、それでも早めに終わらせるに越したことはない。
「悪かったですって。でも、本当大丈夫ですから。休んでて下さい」
「……な、なんでよ。なんでそんなに私を追い出したがるの？」
「え？や、違っ」
「もういいよ。間宮アイス券ありがと。じゃ」
　飛龍さんは執務室を出て行ってしまった。
「……やっちまったなぁ」
　怒らせるつもりなんてなかったんだけど……。でも、これは俺の仕事だしなぁ。

まぁ、夜には部屋に帰って来て許可出してないのに膝の上に頭乗せて来るだろうし、大丈夫でしょ。

＋＋＋＋

だが、翌日になっても飛龍さんは帰ってこなかった。これはマズイな。本格的にピンチだ。飛龍さん、相当キレてるよこれ。

まぁ、明日にでも謝りに行くか。今日はもう無理。仕事に追われて死にそう。しかもまだ終わってないとか笑えない。

ていうか、この報告書って意味あんのか。何に使うってんだよ、この作戦のデータ。どうせ、形だけ報告受け取って中身は読まないんだろ？その癖、出さなかったら「早く出せ」「資源の配布打ち切るぞ」とか脅迫だけして来やがって。

「あーダメだ。やる気なくなって来た」

つーか、昨日の朝からずっと頭と体の節々が痛いし。それに加えて、今日は喉が痛い。

「……あークソ。でももう少しだ」

そうだ、もう少しで仕事は終わる。ゴールは近づいて来てるんだ。

唸らながらキーボードを叩いてると、コンコンとノックの音が聞こえた。

「あい……」

「失礼しま……ど、どうしたの提督？なんか体調悪そうだけど」

入って来たのは蒼龍さんだった。

「いえ、大丈夫です。なんかありました？」

「いや、なんか飛龍と喧嘩したって聞いたから来たんだけど。……ほんとに平気？」

「大丈夫だって。あと、喧嘩してない。こっちが一方的に怒られただけですよ」

「……何したのよ」

「いや、今仕事してるんで後でいいですか」

「うん、大体今ので分かったわ」

「は？」
「飛龍にも同じこと言ったでしょ」
「あー、いやまぁ」
「こっち見て」
「えっ？」
　仕事しながら返事をしてると、蒼龍さんから思いの外怖い声が飛んで来た。
「あのね、飛龍と付き合ってるんでしょ？」
「はい。ケッコンを前提に」
「う、うん……。って、そうならいくら仕事が忙しくても、ちゃんと嫁の話は聞いてあげないと」
「あー……そういうもん？」
「逆に提督だったらどう思うか考えてみなよ。飛龍が仕事してるからって自分に生返事ばかりされたら？」
「いや、仕事忙しいんだなってなりますけど」
「……と、とにかく女の子は無視されるのは嫌なの！」
「別に、無理してるつもりなんてないんですけどね……。なんていうか、昨日からボーッとすることが多くて」
「ボーッと……？」
「はい。なんか……」
　頭痛が痛い、と、テンプレのボケをかまそうとした所で、俺の口は止まった。
　こいつらすぐに人の心配しやがるから、頭痛い事を知られたら「大変！仕事しばらく休んでください！私達が代わりにやりますから！」ってなるのは、カブトムシにスイカをあげちゃいけないって答えを出すより簡単に出る。今の例え、我ながらわけがわからないわ。
　そうなると、作戦中一番頑張ってくれてた奴らにさらに自分の仕事を押し付ける事になっちまう。
「ね、寝不足なんすよね。夜遅くまでゲームやってて」
「自業自得じゃないですか……。とにかく、飛龍にもちゃんとかまってあげてください。仕事の提出期限だってまだまだあるんでしょう

？海域突破、最速で終わらせたんですから」
「……了解しました」
そういうことなら、仕事はとりあえず中断するか。俺は席から立ち上がり、部屋の出口のドアノブに手を掛けた。
「……」
「どうしました？」
「……一人で謝るの怖いから一緒に来てくれませんか」
「ヘタレ」
うるせぇ。
「飛龍さんどこにいます？」
「私の部屋で不貞寝してます」
「じゃ、行きますか」
そう言って、歩き始めようとした直後、体から力が抜け落ちた。自分の体が斜めって、地面が近づいて来る。
あれ？これ、俺倒れてる？
手を地面に着く暇もなく、地面に顔面から倒れた。
「……提督!?？」
蒼龍さんに呼ばれるのを最後に、俺の意識は途絶えた。

第11話　性欲と性格は関係ない。

目を覚ますと、医務室の天井だった。なんでこんなとこにいんだ俺。確か、執務室で蒼龍さんと話してて、飛龍さんに謝るためについて来てもらおうと思って……床が俺に近づいてきたのか。
「そうだ！ポルターガイストだ！みんなに知らせないと！」
「なわけないでしょ。アホか」
冷静な声が聞こえた。隣を見ると、飛龍さんが座っていた。
「倒れたのよ。廊下で」
「え？違いますよ？床の方から俺に迫ってきて……」
続けようとしたところで、声が止まった。飛龍さんは泣くのを必死に堪えてる表情だった。ギョッとして、「どうしたの？」と聞こうとした時には、飛龍さんは俺に抱き付いていた。
「っ⁉？ひ、飛龍さん⁉？」
「良かったぁ……！無事で、良かったよぅ……⁉？」
「無事でって……そんな大袈裟な……」
「大袈裟じゃない！」
1オクターブ高くなった飛龍さんの声に、俺は思わずビビってしまった。
「アレだけ言ったじゃん！大丈夫なの？って！それなのに結局、倒れるなんて……！ほんと、バカなんだから……⁉？」
「……悪かったよ」
「ホント、よ……！」
膝の上で泣いてる飛龍さんの頭を撫でた。まぁ、今回は俺が悪いな。まさか倒れると思ってなかったし。
「いやーでも、まさか倒れるなんて思わなかったなー。健康管理はしっかりしてたし」
「あんた殺すよホント。どの口が言ってんの？」
「え、こ、殺す……？」
マジかよこの人。普通に上司に殺害宣言とか怖過ぎる。

「あんなに無理して棒読みの返事してて健康管理はしっかりしてた？本気で言ってるなら本気で怒るよ」
「いや、俺あんま病気とかしたことないから」
「だまらっしゃい」
　ひ、ひどい……。これは下手に口答えしない方が良いな。
「ま、まぁ、本当にその、悪かった」
「しっかり反省してよね」
「へいへい。……じゃあ、書類持って来てくれません？あと少しで終わるんだよね」
「……あ？」
「冗談だから弓出さないで」
「……私、しばらくここに泊まるから。何か行動を起こす際には私に言うこと。さもないと、爆撃するから」
「瑞鶴かよお前は……」
「彼女と二人きりの時にほかの女の子の名前出さないで‼？」
「はい、ごめんなさい」
　あれ？この子、まだ怒ってんの？許してくれたんじゃないの？
「……それって、看病してくれるって事？」
「た、端的に言えば」
「……」
「何よその真顔」
「料理だけはしないでね」
「むかっ」
　口で言ったよ。
「アレから間宮さんに教わって、すごい上手くなったんだからね⁉？」
「美味くなってなかったらダメだよね」
「見てなさいよ！すっごい美味しいの作って来てあげるんだから！」
「え？作る気？」
　そうこうしてるうちに、飛龍さんは病室から出て行ってしまった。
ああ、俺は今日死ぬのか……。今までありがとう、この世の何かよ……。

大体、ここに泊まるって……医務室で泊まる気？あの人、本当たまによく分かんねぇな。しばらく布団の中に潜ってると、飛龍さんがトレーの上に皿を乗せて戻って来た。
「ただいま」
「……おかえり」
「よし、ご飯の時間よ」
「その前にペンと紙くれる？」
「？　何に使うの？」
「遺書」
「どういう意味ですか！」
だよね、そうなるよね。飛龍さんは俺のベッドの隣に椅子を設置すると、座って皿の中の料理をスプーンで掬った。
「……はい」
「？　え、何？」
「……あっ、あーん……」
「……はっ？」
何をし出すんだこの人は。
「……何してんすか？」
「……た、食べさせてあげてるのっ」
「いや、それは分かるんだけどさ」
なんでそんなバカップルみたいな事を……。少し呆れてると、飛龍さんは涙目になって俺に聞いた。
「……私のご飯、食べれないの？」
「……いただきます」
そのセリフは卑怯だろ。俺は仕方なく口を開けた。ふーふーっと息を吹きかけて、飛龍さんは俺の口の中にカレーを運ぶ。つーか、病人にカレーかよ。別に良いけど。
口の中にカレーが入った直後だ。
「あっづぁっ‼？」
「へっ⁉？」
俺の反応に驚いたのか、飛龍さんは慌てて手を引っ込めた。

「だ、大丈夫⁉？」
「や、火傷した……」
「ご、ごめんね？今、冷やすもの持って来るっ」
　またまた忙しなく部屋を出て行く飛龍さん。あの人、看病とか向かないな。まぁ、気持ちは嬉しいんだけどね。その間、暇だったのでカレーを一口食べた。舌がヒリヒリするのを除けば、普通に美味い。少し料理が上手くなっていた。
　嫁度が上がってきたなぁ、なんて少し感心しながら待ってると、飛龍さんが顔を赤くして戻ってきた。
「……おっ、お待たせ提督」
「あ、うん。すみません、わざわざ」
「ううん……」
　……なんで顔赤くしてんの？キョトンとしてると、飛龍さんは持ってきた水を口に含んだ。
「え、お前が飲んでどうす……んんっ！」
　ツッコミを入れようとした直後、飛龍さんに口を押し付けられた。口の中から流れて来る水。
「……」
　な、なんで口移し……？「どういうつもり？」とか「何してんの？」とか「恥ずかしいんですけど」とか色んな感情が渦巻きながら飛龍さんを見てると、飛龍さんも恥ずかしそうにしていた。あ、これ誰かに唆されたパターンだ。
「……誰に唆されたんですか？」
「……間宮さんと蒼龍」
　こいつ……。恥ずかしがるくらいならやらなきゃ良いのに……。
　まぁ、とりあえず、その、何？
「……口の中に含んじゃうと暖かくなるから舌を冷やせないんだけど……」
「……」
　なんだこれ。飛龍さん顔真っ赤にしちゃってるよ。で、こういう

時って大体……あ、ほらやっぱり。入り口で蒼龍さん達覗いてる。多分、普段からかわれてるんだろうなぁ。
「まぁ、落ち着いて飛龍さん。とりあえず水もらうから」
「……う、うん」
水をもらい、舌を冷やすとカレーを食べた。
すると、恥ずかしがってたと思ったら今度は期待するような目で見だした。この人本当に忙しい人だな。
「……ああ、美味いですよ」
「！　ほ、ほんとに⁉？」
「うん。比叡さんのカレーの5倍は美味いです」
「いやアレと比べられても……」
この前はのど飴入ってたし。何のつもりだよ。
「……ただ、うん。病人にカレーは少し重いんで」
「あっ、ご、ごめんね。次から、気をつける……」
「いやそんな謝らなくても。作ってくれただけでありがたいですし」
昨日、喧嘩した相手なんだぜ？どこまで良い人なんだよ。
カレーを食べ終え、俺は目を閉じた。
「じゃあ、俺寝ますね」
「う、うん……。大丈夫？寒くない？」
「寒くはないけど」
「そ、そう……」
……なんでそんな残念そうな顔してんの？ていうか、なんでそんな表情読みやすいのこの人。
「……な、何？」
「あ、ううん。寒くないなら良いの」
「……やっぱ少し寒いかも」
「！ほ、本当に⁉？じ、じゃあ……！」
嬉しそうな顔をすると、飛龍さんは俺の布団の中に入ってきた。
「ちょっ、何してんの⁉？」
「暖めてあげようと思って……！」
「いやいや良いから！風邪うつるから！」

「大丈夫。じゃ、おやすみ」
「……」
　言いながら、俺の股間を握って来る飛龍さん。ああ、この人それが目的か……。蒼龍さん達見てるんだけど……まぁ、良いか。
「……飛龍さん」
「？　なんですかー？」
「そういうことは風邪治ってからで」
「そんなこと言って。本当は我慢してるんじゃないの？」
「いやそういうんじゃなくて。蒼龍さん達見てるし」
「……ごめん」
　いつからこんなエロい娘になったのかね……。そう思いながら、とりあえず寝ることにした。